

# 桜と日本人

三笠宮崇仁親王 陸士48

編集委…本稿は四十八期(卯月会)の「花だより」で御紹介いただいたものですが、卯月会の御承諾を得て、巻頭に掲載させていただきます。殿下が各地で御講演された記事を御自ら修文され卯月会の記念誌のために賜われたものとのことです。なお、本稿の御紹介につきましては39頁をご覧ください。

## はじめに

われわれ陸士四十八期生が、卒業七十周年を迎えた。感慨無量の極みである。今なお健在の諸君を心から祝福するとともに、すでに幽明界を異にする諸君のご冥福を改めて祈りたいと思う。

私は、幼稚園から初等科を経て、中等科四年まで学習院に通った。その院章は桜であった。現在も大学に至るまで、すべて桜花である。これは学習院創立当初の明治十年以来のことだそうである。

私は中等科四学年終了後、陸軍士官学校に入った。その校歌には「見るも勇まし春ごとに、赤き心に咲き出する、

市ヶ谷台の若桜」とあったし、歩兵の歌「万葉の桜が襟の色、花は隅田(吉野)に風吹く」も愛唱した。また海軍には、西条八十原作の「貴様と俺とは同期の桜……咲いた花なら散るのは覚悟」という歌もあった。

今は陸上自衛隊の歌に「決意も堅きその眉に、仄ほの香るおお桜花」(久遠の平和)とあるし、海上自衛隊にも「若い命の血は燃える、薫れ桜よ黒潮に」(海をゆく)と桜が出てくる歌がある。

## 桜の種類

本稿では、日本人が昔から桜をどう考えていたか調べてみたい。

桜は双子葉植物で、バラ科のサククラ属に分類される。そのサククラにも花が美しい観賞用(花木)と、実が美味しい食用(果樹)とがある。種類は大変多く、約二〇〇種が北半球の温帯地域、特に東アジアを中心に、一部がマレーシア山地やアンデス地域に分布している。アナトリア地方(トルコ国)から東ヨーロッパや北ヨーロッパにかけて

は、「セイヨウミザクラ」や「スミンミザクラ」が森林中に自生している。

因みに、トルコ国のギレスン市と日本の寒河江市(山形県)が、一九八八年にサククラを仲介として姉妹都市になったが、この場合のサククラは日本古来のものではなく、アナトリアにも多い実を食べる種類で、寒河江市の「チェリーランド」には「トルコ館」が設立され、日・土友好親善に寄与している。またチェーホフが書いた戯曲「桜の園」のサククラも、サクランボをとって食べる種類であった。

群」、「マメザクラ群」、「ミヤマザクラ群」、そして「カンヒザクラ群」がある。日本人は桜に対して異常なほどに反応を示す。日本は温帯に位置しているといつても、昔は暖房も無く、ウインタースポーツも無かったから、冬が終わって次第に昼間が長くなり、日光も輝きを増し暖かくなると、待望の春がやって来る。それは桜が咲き始める頃でもあり、また稲作の始まる季節でもあった。

平安時代の後期には、すでに「花」といえば桜のことであり、今でも「花見」に行くといえは桜である。

## サククラの意味

日本に自生した桜

日本人は春に桜を見に行くが、今日では「ソメイヨシノ」が多い。これは明治維新の頃、染井村(現在の豊島区駒込)の植木屋(伊藤某)が広めたからという。「オオシマザクラ」と「エドヒガン」の雑種であることが、竹中要博士によって証明されている。毎年、気象庁が発表する桜の開花予想はこの「ソメイヨシノ」を基準としている。

しかし、昔の日本人が愛好し歌に託した有名な吉野山の桜はこれではない。「ヤマザクラ」である。日本列島における自生種には、「ヤマザクラ群」、「ヒガンザクラ群」、「チョウジザクラ群」、「マメザクラ群」、「ミヤマザクラ群」、そして「カンヒザクラ群」がある。日本人は桜に対して異常なほどに反応を示す。日本は温帯に位置しているといつても、昔は暖房も無く、ウインタースポーツも無かったから、冬が終わって次第に昼間が長くなり、日光も輝きを増し暖かくなると、待望の春がやって来る。それは桜が咲き始める頃でもあり、また稲作の始まる季節でもあった。

平安時代の後期には、すでに「花」といえば桜のことであり、今でも「花見」に行くといえは桜である。

サククラの意味

日本語の「サ」には「早い」とか「新鮮な」という意味と、もう一つは「稲」という意味があった。日本の古代文化が稲作によって発達したことを顧みる時、当時の人たちが「稲」を神から授かったものと信じ、稲魂(イナダマ)が存在すると信じたのも頷ける。

他方、「クラ」には「座る所」とか、「物を置く場所」という意味があった。「稲」を貯蔵する場所も「稲倉(イナクラ)」と呼ばれた。従って、「サ+クラ=稲魂(神)の在す場所」とも解釈できる。

さて、農民たちは稲作を始める頃になると山に登り、神の依代の木に酒

肴を供え、ともに飲食した。それこそ

「花見」の始まりであった。そして依

代の木を村に持ち帰って田の水口に立

てると、その神は「田の神」として稲

作を見守ることになる。神の依代とし

て信じられたのは、サクラ、マンサク、

そしてツツジなどであった。

田植えの時の祭りを「サオリ（サビ

ラキ）」と呼ぶし、「サオトメ」は田植

えをする乙女であり、その季節が「サ

ツキ」である。収穫が終り「田の神」

を山にお帰しするのが「サノボリ（サ

ナプリ）」であった。その際、神にご

馳走を供えるが、それが新嘗祭の源で

ある。

梅と桜

桜のことばかり述べたが、梅のこと

も忘れてはなるまい。日本に梅は原産

地の中国からもたらされた。その時機

は明らかではないが、古事記や日本書

紀には出て来ないのに、万葉集に現れ

る植物の歌では梅がいちばん多く、

百二十首ある。

それなのに桜は五十首に満たない。

ところが、十世紀の初めに成立した古

今和歌集になると、桜が約七十首、梅

は約二十首となる。さらに新古今和歌

集では桜と名指しているものだけでも

八十五首あり、花としてあるが桜であ

らうと想像されるものが五十首以上も

ある。それに対して梅は僅かに十七首

に過ぎない。

京都御所の紫宸殿の前庭にある「左

近の桜」も最初は梅であり、十世紀半

ばに桜に変えられたという。

これを要するに、奈良時代は中国文

化受容時代であり、平安時代にはいる

とそれを克服した新しい日本文化が

興ってきたといえる。外国文化に一時

は好奇の目を見張った日本人も、やが

て新しい方向に進路を修正したのであ

り、そこにこそ新しい文化的発展が約

束されたに違いない。

桜花の美しさ

一口に桜といっても、見る人により、

見る時機により、見る桜の種類により、

人の心中には様々なイメージが描かれ

る。冬の間の幹と枝だけの桜、春光麗

らかに蕾もほころび始める頃の桜、三

分咲き、いや五分咲きと噂される頃の

桜、そして満開の桜、ちらほらと花卉

が春風に舞い始める頃の桜、やがて花

吹雪ともなる桜、散り終えてしまった

桜、いずれも人それぞれの感懐を抱く

に相違ない。

鶯の木傳ふ梅のうつろへば 桜の花

の時片設けぬ (万葉集、卷十)

(鶯が枝から枝へ飛び移っている梅の

花の盛りが過ぎると、桜の咲く時が近

づくよ)

見渡せば春日の野辺に霞立ち 咲き

にほへるは桜花かも (同上)

春雨のふるは涙かさくら花 散るを

惜しまぬ人しなれば (古今和歌集、卷二)

残りなくちるぞめでたきさくら花

有て世中はての憂ければ (同上)

(桜の花はすっかり散ってしまうのが

めでたいのだ。未練がましく承らえて

いれば、最後はつらい思いを味わうの

だから……)

花は桜木、人は武士

近世になって、貝原益軒や新井白石

などが、この美しい桜の原産地は日本

だけである、という説を唱えた。賀茂

真淵(一六九七—一七六九)は、

もろこしの人に見せばや三吉野の

よしののやまの山ざくらばな

の和歌を残し、博多の人、二川相近(松

陰)(一七六七—一八三六)は今様で、

花よりあくるみよしのの 春の曙み

せたらば

からくに人もこまびとも やまとこ

ころになりぬべし

これらは日本人の誇りを率直に歌っ

たものだが、ナシヨナリズムのテキス

トとなったかも知れない。

また「花は桜木、人は武士」は、「仮

名手本忠臣蔵」初演の際の判官切腹の

場面の台詞にあった。これは「花」は

桜が一番美しいし、人間社会では武士

が一番上位だという意味であり、桜と

武士を関係づけるものでもなく、また

死を予想させるものでもなかった。

しかし佐久良(または桜) 東雄が桜

花を見ながら詠んだ和歌、

事しあらば我が大君の大みため 人

はかくこそしぬべかりけれ

は、武士(後の軍人)の責務と死を暗

示しているかと思われる。

桜のシンボリズム

明治二十五年頃に作られたという軍

歌に、「桜花」があった。

わが国まもる武士の 大和心を人間

わば 朝日に匂う山桜 咲くや霞の九

重の 左近の花に風吹かば 四方に打

ち出ん武士の 守れ守れや矛とりて

仇し義雲打ち払い 千春万春動かざる

……桜花こそ忠義なれ 桜花こそ愛た

けれ

我々が七十年前に、市ヶ谷舞台上で合

唱した軍歌や、現在の自衛隊の歌にあ

る「桜」は「はじめに」の項に記した。

かつて薄田泣菫は「昔の人が、『さ

まさまの事思ひ出す桜かな』といっ

が、それはその詩人自らの追想であつて、桜には何の追想もありません」と述べたが、近くは岡部伊都子が随筆の中で、「桜の木は知らないことだ。人が自分に桜という名をつけたこと。この国の人びとが、ただならぬ愛情の念を抱いて桜を視ること。木はおのがいのちのうながしにあふれて、花咲き匂うばかり。そして、ただ、花散りしきるばかり。人が見ても、見なくても、桜は桜の花顔に生き、花期全身に艶をはりつめて、その花力を放ち尽くす」という。

私はいたく共感を覚えた次第である。

